

現代史^(上)

小田 実



河出・書き下ろし長篇小説叢書 6

書き下ろし長篇小説叢書 6

著者略歴 1932年大阪に生れる。57年東京大学文学部を卒業。
58年フルブライト留学生としてハーバード大学に留学。小説
『明後日の手記』『わが人生の時』『アメリカ』『泥の世界』(以
上河出書房)、『大地と星輝く天の子』(講談社)；評論『日本
を考える』(河出書房)、『壁を破る』(中央公論社)、『戦後を
拓く思想』『平和をつくる原理』(以上講談社)、『義務としての
旅』(岩波書店)、『日本の知識人』『人間・ある個人的考察』
(以上筑摩書房)；旅行記『何でも見てやろう』(河出書房)他。

現代史(上)

発行所	東京都千代田区 神田小川町三の六	株式会社 河出書房新社 振替口座(東京)一〇八〇二番		昭和四十三年十一月二十日 昭和四十三年十一月二十五日	初版印刷 初版発行	定価六九〇円
印刷者	和 田 彰 三	東京都千代田区神田小川町三の六 発行者 中 島 隆 之	著 者 小 田 実			

装 幀 池 田 龍 雄

現代史

(上)

第一章

1

聖子が頼子の事故死のことを聞いたのは、風呂からあがって二階の客間でテレビを見ていたときだった。聖子は風呂のあとではいつも縞のギンガムのバジャマの上に大好きなサモン・ピンクのガウンを羽織ってそのまま二階へあがると、客間で、隣りの彼女の室から持ってきた携帯テレビを見る。ときにはテーブルの上の小さな卓上ランプのスイッチを入れることもあったが、たいていは電灯をつけないうまま、まっくら闇のなかで彼女はテレビを見た。

二階には客間が二つあってそれぞれ聖子は好きだったが、風呂のあとで行くのは庭を見下ろす大きなほうの客間ではなくて、彼女の室の隣りの小さな予備の客間だった。そこは玄関の真上にあたっていて、ベランダに通じる大きなフランス窓からは坐っけていても門が見えた。めったに使わないものだから扉を開くと心なしか徹くさい空気がひんやり流れて来て、それは聖子の湯上りの火照った頬にかえってころよか

った。

聖子は肌が荒れ性のせいかな、いったいに乾いた空気よりもこの室のようなしめっぽい空気を好んだ。空つ風の吹きすさぶ東京の空気よりも、どんなに晴れわたって乾燥した日でもどこかにどんよりしたものがあったよっている関西の空気が肌に合う気がするのも、あながち聖子が関西生まれの関西育ちのせいばかりではないだろう。母も三人の姉も聖子とはちがつてあぶら性で、荒れ性の聖子をかえってうらやんでいた。

「セーちゃんはママが浮気して生みはった子やな」いちばん下の姉の恵子は、「生みはった子」の「子」を「コウ」と長く引っぱりように発音して、よくそんないやがらせの冗談を言った。母は恵子がそういった冗談を言うときと肥った全身をゆさぶるようにして笑い出し、父はいつものように眼顔で笑うのだが、そのとき、古武士のようにいかめしい父の顔つきに一瞬、神経質なかげが現われるような気がしないこともない。もし事実だったらと、ときどき聖子は思う。それがどういうことなのか自分でもさっぱり見当もつかないが、その想像はこわくて、それでいてどこかに快感がなくもなかった。

けれども、実際のところ、聖子の肌は母や姉たちがうらやむほどのこともなかった。冬の乾ききった日など、いくら荒れ性用のクリームをつけてみても、まだまだつけ足りない気がしてならない。聖子は今から六年前、高校二年のとき、

「*Foreign Study*」の高校生留学プログラムで一年アメリカに留学したことがあるのだが、そのときは困った。日本とちがってアメリカの女子高校生はみんな化粧をしていて、そ

れがたいい派手な厚化粧で、聖子もそのときはじめて化粧し始めるようになったのだが、いったいに西洋人の女、ことにアメリカの女性の肌がいつもかさかさ乾いていて、いろんなしみが肩から腕のあたりについていたりするのは、ひとつには肌をとりまく空気が同じようにかさかさ乾ききったものであるためかも知れない。聖子のいたのは、冬、乾燥することである中西部の北のほうの田舎町だった。冬の夜、くらがりのなかでナイロンのスリッパを脱ぐと火花が出たりしたが、あれはきれいで、ときどき彼女は火花が出やすいうにわざと手荒らにスリッパを脱いだ。

そのころ着ていたベージュのスリッパを聖子はまだ持つていて、いつもは下着を入れたひき出しのいちばん底にしまつてあるのだが、真夜中、みんなが寝しずまったあとで取り出して体にあててみるものがあつた。もちろんこの上野芝では、どのように手荒らに扱つてみたところで火花の出る気づかいにはなかつたが、ナイロンのすべすべした感触を肌にじかに感じると、アメリカの思い出が同じようにじかに肌によみがえってくるような気がして、ときとして聖子は涙ぐんだ。聖子はそのどこにも飾りのないシンプルなスリッパが好きで、はじめてのデイトのときも、クレイトン・ハイスクルの卒業式のときも、右すそのところに小さな花のアプブリケがある白のパンティとともに下着に選んだ。卒業式に卒業生全員でとった記念写真は、アメリカから帰つて来た直後にアメリカでとった写真の整理用にと母が買つてくれた大きなアルバム第一頁に貼つてあるのだが、四角な帽子を頭にのっ

けて手に免状を持ったガウン姿の聖子は、のっぽのメアリーとジェーンにはさまれて小さくかわいく、顔はまるで泣き笑ひしているように見えた。

ほかに三つ、聖子がアメリカから持ち帰つて来て、同じところにかくしてあるものがあつた。

一つは天使の羽根のように長いケープのついた薄いピンクのネグリジエで、これまで一度だけ聖子はそれを着て母の室の大きな姿見のまえに立つたことがある。ちょうど父も母も弟の和人も二人のお手伝いさんも家じゅうが出はらつていたときで、聖子は長いあいだためらつたあげく、口紅を思いきつて濃いめに刷いてからネグリジエを着た。いつも着ているパジャマとちがつて、そのナイロンのネグリジエはケープを上にはね上げると、恥ずかしいほど体が透けて見えた。

ネグリジエは、実は、彼女の花嫁の床用のものだった。クレイトンの洋品店「フエアレディ」のショウ・ウィンドウに飾つてあつたのを通りがかりに見つけて買ったものののだが、それをまず見つけて「あれ、いいわね」と感声をあげたのはナンシーだった。聖子はうなずき、うなずいてから「そうでもないわ」とあわててつけ加えたのだが、それは、もうそのころには聖子がナンシーを嫌いになつていたからではなくて、ネグリジエを見たとき、とつさに買おうと心に決めていたからだらう。翌日、聖子はひとりで「フエアレディ」へ行つた。二十九ドル九十九セント。税金が十五セント。買っているあいだ、ナンシーが入つて来はしまいかと胸がどきどきした。アメリカ製だとしてつきり思つていたらそうではな

くて、店の主人のあから顔の大男のジムが「輸入品だよ、お嬢さん」と誇り顔に言った。デンマークの製品で、ラベルを見ると、コペンハーゲンの会社のものであった。

コペンハーゲンへは聖子はまだ一度も行つたことはないが（アメリカへはまっすぐ行き、まっすぐ帰つた。ハワイへは寄つた。行きと帰りにそれぞれ一泊ずつ）、きつと、その長いケープのように天使の羽根を思わせる街なのだろう。コペンハーゲンについて聖子の知つてゐることと言えば、アンデルセンとかわい人魚の像ぐらいのものだが（母がソ連の帰りにコペンハーゲンに寄つて、人魚の絵ハガキを送つて来た）、

もちろん、そこは北欧の街だから真夏でも冷涼の氣にみちていて、街はひっそりとして落ちつきがあり、美しく、清潔で、紙屑など落ちていないにちがいない。まだアメリカにいたときから聖子がひそかに心に決めていたことが一つあつて、それは新婚旅行にコペンハーゲンへ行くということだつた。その計画は彼女が交通公社から貰つてきた航空会社の時刻表によると不可能なことではなくて、たとえば、日曜か水曜の夜、スカンジナビア航空の北極経由便に乗るとすると、コペンハーゲン到着は翌朝六時〇五分。月曜、土曜の夜なら日本航空、木曜夜には西ドイツのルフトハンザ航空のコペンハーゲン直航便がそれぞれ出るが、せっかく北欧の地に行くのだから、やはり、スカンジナビア航空にしたいと聖子は思う。それにスカンジナビア航空にするなら、式を日曜にすることもできて、万事都合だろう。出発は夜十時というおそい時刻なので、午後から披露宴をゆっくりやつても十分に時

間の余裕はあつた。

コペンハーゲンの豪華なホテルの一室で、そのネグリジエを着て、夫の胸に抱かれ、ホテルの窓から暗い北海をじつと見る。そのあとしばらくたつて、聖子の未来の夫は天使の羽根に包まれた彼女をたくましい腕でかるがると抱き上げると、無言のまま別室の花嫁の床めがけてゆっくり歩を移すのだが、そのとき、いつか見た喜劇映画の主人公のように途中でへたりこんだりは決してしないだろう。日本人の男のたいていは弱虫で妻をそんなふうには抱き上げることができない、「それが毛唐にヤマトナデシコをしてやられる理由サ」とある週刊誌に書いてあつたが、聖子の未来の夫は、まさかそんな情けない人物ではないにちがいない。しかし、そうやって花嫁の床へ運ばれること、それはどんな氣持がするものだろう。聖子は恵子同様週刊誌マニアで、たいていの週刊誌に眼を通してゐるのだが、ことに『週刊レディ』を毎週欠かさず買うのは、グラビアの色の仕上げがきれいだといふことのほかに、「新婚のあなたのためのセックスのすべて」とか「性の二十の扉」とかいった小さな色刷りの折り込み付録がついてゐるからだつた。ほんとうにどんな氣持がするものだろう。その折り込み付録にあつた通りの姿態をとつてみたことがあつた。それは一種の体操で、それをつね日ごろくり返しておくと、いざというとき快感がたかまるというのだが、今度、またみんなが çık かけて留守になることがあつたら、ネグリジエを着て、ベッドに横になつて、頭からシーツをかぶつて（それでもしないと、とても恥ずかしくて出来にくい氣が

する)、思いきりさまざまなかっこうをしてみたいと思うこともあった。「なんでもあらへん。すぐ、すんでしもうた」恵子がいつか二人きりで話していたとき言った。話をもちかけたのは聖子で、彼女は「恵ちゃんの新婚旅行では……」という切り出しのことばだけで真赤になってしまいがちで遠まわしに訊ねたのだが、恵子は拍子ぬけするくらいにさばさば答えた。「痛かった?」「すこしね」その問答のあとで、実は新婚旅行のときはじめてではなかったのだというおどろくべき事実を、恵子はあいかわらず何気ない口調で打ち明けた。相手はもちろん義彦で、見合いしてから結婚までの四カ月のあいだに彼が「しんぼうできんようになった」のだという。

「私には魅力がありますもんね」恵子は一昨年八月、二人目(男の子で、透と言った。母親に似て大きなおでこで、通称、でこちゃん。上は今年小学校に入った女の子で純子。彼女は父親似で、眼が大きくかわいかった)を生んでからめつきり肉づきのよくなった腰のあたりに手をあてて、軽くしなをつくるようにしながら笑った。「セーちゃんも魅力がおありですよって、用心せんとあかん」「どこで……」聖子はそのことをどのようなことばを使って言いあらわしてよいのか判らなくなつて口ごもつた。「……しはつたん」「さあ、どこでやるか。……案外、このうちのなかかも判らへん」恵子ははぐらかすように言つてまた笑つた。

もちろん恵子の四カ月の婚約期間のあいだ義彦が訪ねて来たときには母がいつもいっしょにいて、ときにはまだ高校生だった聖子までひっぱり出されて客間で夜おそくまで話し込

んだこともあつたから、「このうちのなか」ではまず不可能なことだつたにちがいない。とすると、聖子の頭にまずひらめくのは毎日通学の途次、阪急電車で大阪から十三に近づくとともに淀川の鉄橋ごしに見えて来て、いやおうなしに彼女の眼がそこに吸いつけられて行く色とりどりのネオンサインの看板の列なのだが、義彦と恵子はそうしたネオンサインのひとつ、たとえば、ひときわ高く目立って聖子の意識に焼きついたように残っている「ホテル・エデン」の六文字の下に姿を消したのだつたらうか。そのさまを想像すると、まるで自分のことであるかのように聖子の全身はひとりでに熱くなつてくるのだが、ときどき思いがけないことを平気でやつてのける恵子のことだつたから、そんなこともほんとうにあつたのかも知れない。それとも、聖子がネグリジェを着たときのように、留守をみはからつて義彦がしのび込んだのではないか。その想像のほうがロマンチックで聖子の好みにあうような気がして、大学院の清水教授のゼミナールで実際に『ロミオとジュリエット』を読んでいる彼女は、下調べにあきるときままつてそうした空想にふけつた。しかし義彦も恵子も最近ではめつきり肉づきがよくなつてしまつて、そのロマンチックな想像も滑稽でなくなつた。結婚前の恵子は聖子のように痩せっぽちで、義彦も、彼が笑いながらいつも言うことだが、「東大大学院博士課程在学の博士候補者」らしく痩せていた。もつとも痩せてはいたが、全身がいかにも生氣に満ちあふれた感じで、その点では並みの「博士候補者」とはちがつていたに相違ない。それが結婚して、やがて純子が生ま

れて、そのあとアメリカへ行つてハーバード大学の所在するマサチューセッツ州のケンブリッジで暮しているあいだに「あんまり、二人して精出してアイスクリーム食べたからや」と恵子は自分で言つて自分で笑うのだが、たしかに、昔と今の二人を比べると、肥る薬の「服用前」「服用後」の二枚の宣伝写真のように見えた。義彦にも、ときどき神経質に動くこめかみのあたりにかつての瘦身の秀才らしい風貌は残つていても、ボストンで中華料理店の支配人にまちがえられたというくらい全身に貫禄がついていた。恵子の説によると、アメリカ人の肥り方は日本人とはちがつていて、日本人の場合は下腹が出ばつてふくれ上るという感じの肥り方なのだが（桃谷に住むいちばん上の姉の伸子の夫の重治がいい例だと恵子は指摘した）、アメリカ人の場合はちがう。全身に満遍なくし

っかり肉がついて、こりこりしたまゐい感じになる。「やっぱし、ご飯とアイスクリームのちがいやね」恵子は結論するように言うのだが、その彼女の説にしたがうと、義彦の場合は、まさにアメリカ人のような肥り方だった。すくなくとも、ニューヨークやシカゴのような大都会の中華街で出会った中国系アメリカ人の肥り方であった。聖子がハワイで会った二世、三世たちにも、そんなのがいた。

けれども、アメリカに一年いて、そのあいだに彼女もアイスクリームを精出してなめたのに聖子が一向に肥らなかつたのは、恵子の言う通り、結婚までは瘦せつぽちで結婚後急速に肥りだすという島内家の家系に起因することかも知れない。「みんな、そうとちがう？ ママがそうやし、伸子姉さん、

良ちゃんもそうやし……」母と二人の姉をひきあいに出してから、彼女は親類の誰彼をリストにつけ加える。遠山の伯母。京極の叔母。従姉妹の佐々木の葉ちゃん。「セーちゃんもわるいけど、例外とちがうと思うけど」

聖子は恵子とお風呂へ二人で入ったとき、そなえつけの台秤で体重をはかりあつたことがある。そのときには聖子が四十三キロちよつと、恵子が五十一キロもあつた。恵子も結婚前は四十三、四キロだったというから、六、七キロも結婚後に増えたことになるのだが、聖子もいつかはそうなるのだらうか。恵子は長身の聖子よりもずっと背が低くて、二人で並んで立つと彼女の背は聖子の耳までしかなかったが、おそろいで阪急で買った裾にこまかな花の刺繍のあるフランス製のスリッパを身につけて台秤の上にとつた恵子のまるみをおびた腰のあたりに、聖子は恥ずかしげに眼をやつて、何故ともなく赤面した。そんな彼女を素知らぬげに、恵子は最近また義彦がある綜合雑誌に書いた「現実的見地より日中関係を論ず」という論文が朝日新聞の論壇時評に顔写真入りで大きくとり上げられたというニュースを得意顔にしゃべりつづけていた。「そやけど、ジャーナリズムであんまり騒がれるようになる……」台秤からビョンと勢いをつけるようにして降りながら、恵子はそれが癖の一種間のびのした口調で言つた。「学者の世界ではあんまり出世できんようになるんとかうかしら。……セーちゃんの大学の先生にも、そんないやはるんとちがう？」聖子は「ふん、ふん」と上の空で返事をして、ワンピースを頭から乱暴にひきかぶつた。

ネグリジュのほかに、聖子がアメリカから持つて帰つて来てひき出しの底にかくしてしまつてあるのは、厚手の男物のシャツと電気剃刀だった。二つともクリスマススの休暇にニューヨークに出たときに買ったものだが、その買物をしたのは、折よく父の会社のニューヨーク支店長の小畑さんに急用ができて、小畑さんの部下の若い男の人がついて来たときだったから、「弟へ買ってやるんです」という嘘をこだわりなく言うことができた。買ったのはどちらもロックフェラー・センタ一の地下の商店街で、二つの買物を終えて出て来たときにはもう暗くなつていて、ロックフェラー・センタ一の中心のスケート・リンクのそばに立てられた大きなクリスマス・ツリーに色とりどりの灯がついていて、それがとてもきれいだつた。

シャツはアメリカ製でアメリカのものらしく野暮つたいがどつしりと厚みのある感じで、そのシャツの厚み、重みは、ユベンハーゲンのホテルでネグリジュを着た聖子がよりかかつて行く厚い胸の持ち主にびったりしていることだろう。結婚式も終り、披露宴もどこおりなくすんで二人きりになつたところで、それは、つまり、S.A.S. スカンジナビア航空のジェット機の座席に落ちついたときのことだが、聖子はしづかに微笑しながらシャツを包んだ紙包みを彼に手わたすだろうが、そのとき、彼女の顔にはほんのりと赤味がさしているにちがいない。そして、ユベンハーゲンのホテルに落ちついてから、聖子は電気剃刀を彼にわたすのだが、いちばんいいタイミングは、そのぶあついシャツを着込んだ彼がいざ髭をそろうとしてトイレットに消えようとする寸前だろう。彼

の髭はもちろん濃く、抱きよせられると聖子の頬は痛くて、そうした髭には日本製の電気剃刀は歯が立たないにちがいない。ときどき彼女はひき出しの底から電気剃刀を取り出して動かしてみた。スイッチを入れるといつでもプーンと軽快な音がして、こちよく剃刀は動いた。一度そんなふうにしてほんやりしていたら、和人がドアにノックもしないで入つて来た。聖子はあわてて電気剃刀を机の下にかくして、「和ちゃん、人の室に入るときにはノックせんとあかへんで」とたしなめたが、和人は返事もしないでそのまま出て行つてしまつた。

東大受験に失敗して予備校に通い出したところから、和人はいつもそんなふうな反抗的な態度をとるようになった。それほど受験の失敗が身にこたえたのだろうか、昔は、和人ほど従順でやさしい弟はいないと聖子は思っていたのだ。聖子が高校二年のときに「^{アメリカン・フットボール・リーグ} A. F. S.」高校生の留学のプログラムの試験に合格してアメリカに行つたところ、和人は彼女のことをほとんど英雄のように尊敬していて、一週に一度、彼女にまるでファン・レターか幼い恋文のような手紙を書き送つた。聖子も二度に一度は弟の熱情にこたえていて、二人の心は十分に通じ合っていた。クリスマススには、休暇中ずつとやかいかいになっていたクイーンズの小畑さんのアパート気付でクリスマス・プレゼントがとどいた。水玉模様の絹のスカーフで、「セーちゃん、クリスマススの本場アメリカでのクリスマスお目出とう。僕のプレゼントです。僕もがんばりますから、セーちゃんもがんばつて下さい。和人」と、そえられ

ていた小さなカードにあった。カードの裏には、いつか手紙で教えてやったキスのしるしの「X」がいくつも書きつらねてあって、それを見ているうちに聖子はいつのまにか涙ぐんでいた。

聖子から和人へのクリスマススのプレゼントは、インディアンがはくモカシン・シューズだった。やわらかい皮の手づくりのつっかけ靴で、聖子が羽田へ帰り着いたとき、和人はわざわざそれをはいて迎えに来ていた。あとで母から聞くと、まさかそんな靴で大阪から東京まで行くわけにかなかったからモカシン・シューズはスニーカーにつめて来て空港ではきかえたそうだが、聖子が飛行機から降りて来ると「セーちゃん！」という呼び声が上のフィンガーから聞えてきて、顔を上げると、母と和人と父の秘書の一人の木村さんがそこにいて、和人は彼女の名を呼びながら片足を高く上げてモカシン・シューズを見せた。

それからも散歩にいつしよに出るときなど、彼はモカシン・シューズをはき、聖子は聖子で水玉模様のお斯卡ーフを首にまきつけたものだが、そういう習慣もいつしかなくなつてしまった。受験に失敗して以来というものの和人はまるつきり出不精になつてしまつていて、聖子が声をかけても十度に一度も応じようとしない。そして、それとともに、スカーフもどこかに消えてしまった。まえのお手伝いさんの山下君（と、男の子のような色の黒い高知から来た少女のことを聖子と恵子は呼んでいて、おしまいには母までときどきそんなふうと呼んだ）が半年ほど前に母の急病でひまをとつて国に

帰ることになったとき、聖子はあわてて自分の不要になったスエーターやアクセサリーの類をとりまとめて彼女に手渡したのだが、そこにとりまぎれて入つていたのかも知れない。和人のほうも和人で、聖子は彼がモカシン・シューズをはいている姿をもう見かけたことはなかった。

風呂のあと、二階の客間のまっくら闇のなかでひとりテレビを見るという風変りな習慣を聖子が始めたのは、この夏、ソニーの新しい携帯テレビをデザインの美しさにひかれて買つてからのことだったから、まだ三月とたつていないのだが、ずっと以前からこの習性をもちつづけてきているような気がしてならないのは、よほどそれが気に入っているからなのだろう。まっくら闇のなかで、寝椅子の上に思いきり両脚をのばして坐り、そばのテーブルの上にテレビをおく。その姿勢は彼女の好きな姿勢で、そうしているとほんとうにくつろいだ気分になる。電気を消したままでもテレビの画面の明るさとフランス窓から入つて来る門のわきの大きな水銀灯の光で、サモン・ピンクのガウンに包まれた彼女の全身は、くらがりのなかにやわらかく浮かび上つて見えた。足には大きなボウのついた部屋ばきをはいて、エジプト製だという黒と赤のダンダラ縞のストウールの上にのせる。ときどき、彼女は足をばたばたさせた。一度など、はずみで部屋ばきとび、壁にあたつて大きな音をたてた。そのときはひやりとしたが、ふつうはテレビの音量をできるかぎり小さくしほつて、ときにはイヤホーンを使つたりするから、誰も聖子がそこでそんなふうにして携帯テレビに見入つているとは思わないだ

ろ。聖子はその小さな秘密を気に入っていて、最近のようにめっきり寒く、半時間もたつと湯ぎめしてくるようになって、がまんして火の気一つないまっくら闇のなかで坐っている。もう少ししたらこの予備の客間にも電気ストーブがそなえつけられるだろうが、それまでどんなに寒くなっても彼女は耐える気でいた。

このあいだまではオリンピック、オリンピックで日が暮れて、恵子のことばを借りると「バカみたい」（それでいて、恵子も聖子も熱心にオリンピック番組を見た）だったテレビだが、ふつう、テレビで聖子が見るのは、まず、ドラマだった。外国物のテレビ・ドラマより彼女は日本のものが好きで、笑われるかも知れないが（友人には言ったことはない）とりわけ時代物が好きだった。民放のよりはやはりNHKのものがよくて、義彦によく「きみの意識はおくれているな」とからかわれたりするのだが、お金が十分にかけてあるせいだろう、キヤストも豪華で、それだけでNHKのほうがすぐれていた。母も三人の姉たちもNHKが好きで、義彦は同じことばを使ってみんなをからかうのだが、義彦だってNHKに出演する話があれば、ほかの民放のときのように決してこわったりしないと思子に告げ口してくれたことがある。

テレビ・ドラマがなければ、聖子は海外のドキュメンタリー映画にチャンネルを合わせた。事件のドキュメンタリーではなくて、たとえば、「アラスカの風物詩」といったような、NHKでいえば「海外特別報道班」が出かけてつくってきた旅行のドキュメンタリー映画なのだが、NHKのでも民

放のでも、そうしたドキュメンタリー映画を見ると、ふしぎにアメリカにいたときのことか思い出されてきた。テレビの小さな画面に映し出されているのがパリのシャンゼリゼであろうと、アフガニスタンの荒野であろうと、どういうわけからなのだろうか、画面の映像と二重写しのようになって聖子の意識に浮かび上ってくるのは、たとえば、クレイトン・ハイスカールの校舎や校庭、あるいは、そのクレイトンというデトロイト郊外の自動車会社の幹部社員の家がたち並ぶ瀟洒な小都会のたたずまいで、もう一度行ってみたいいいな、とときどき彼女は思った。行くなら、もちろん、新婚旅行の途中で、コペンハーゲンからの帰りに少しまわり道して寄ってくればいいのだが、ナンシーのところに泊まるのはもうごめんだった。彼女は一度結婚してニューヨークに二年ほどいて、一年ほどまえ離婚し、またクレイトンの両親の家に戻って来ていたが、このところ手紙が来るのがとどえているのは、新しい相手を見つけたしるしなのかも知れない。彼女は焼きもちやきで、聖子が夫とともに現われたりすると、そのとき自分に相手がいなければ昔のようにまた意地悪をするにきまっていた。

テレビ・ドラマも海外ドキュメンタリー映画もないときに聖子がチャンネルを合わせるのは、教養番組だった。経済の話は眠くなるが、がまんして聴く。いつかそうしていたら、父の顔が突然画面に出て来たのにびっくりした。「政経分離の現在と未来」という番組のなかに短かいインタビュウがあって、インタビュウを受けているのが父だったのである。聞

き手のほうもときどき家にやって来る日本経済新聞の人だったが、知っている人の顔をテレビで見るのは奇妙なものだ。

父は話しながら少し上眼づかいに視線をそらすようにして微笑し、それはそれでまぎれもなく父のいつものやさしい微笑にちがいがなかったが、それでいて、いつもとはちがって、聖子がそれを独占しているわけではない。そのときに感じた奇妙な感情は、義彦にあとでそれを話すと、「セーちゃんは、つまり、大衆、テレビを観る大衆に焼きもちをやいたわけだ」と説明をつけたのだが、その説明もひょっとすると当たっているかも知れない。何か父が自分の手のとどかない遠いところに、誰か見知らぬ人の手で連れ去られてしまったというような感じであった。義彦も最近よくテレビに出て、恵子の言い方をする、「まるで痴漢みたい」にいつもにやにやしている

そうだが、残念なことに聖子はいつもその痴漢ぶりを見るチャンスが逸していて、そのとき自分がどんな感じにとらわれるのかまだ判らないでいるのだが、恵子はそうした奇妙なさびしさに悩まされることはないのだろうか。こんなことを訊ねると、また、「さびしがりやのおセンチさん」と彼女にかかわれそうなので黙っているのだが、一度、聖子は恵子にそのことを訊ねたい気持でいた。

実際、テレビというものはふしぎなもので、逆に、いつも画面で見なれている人に街で会ったりすると、まるで知人にもばったり出会ったような気がする。桃谷の伸子の家から少し歩いたところに、漫才師の楽苦郎が建てたマンション風の高級アパートがあるが、いつだったか、その前で楽苦郎に

出会って思わずおじぎをしてしまったことがあった。おじぎをしてしまってから気がついて聖子は全身が火照ったが、彼はもうそんなことには馴れっこになっているのにちがいない、軽く会釈を返したが、それは変に威張ったものに見えてあまり感じがよくなかった。聖子が一時ほど楽苦郎が好きでなくなっただけのも、そのあとで週刊誌ですっぱぬかれた離婚事件のせいではなくて、おそらくそのこともあったのだろう、母と昼食を食べているときなどにテレビに彼が出てきても、わざわざチャンネルをまわして別の番組に切りかえることもあって、母が「どうしはったん」といぶかしんだ。

教養番組で好きなのは、遠山定とか大川五郎とか、そういったジャーナリズムで活躍している若手の作家、評論家が出る番組で、そんなときにはテレビ・ドラマも海外ドキュメンタリー映画もやめにして、そっちのほうに聖子はチャンネルを合わせた。ことに聖子は遠山定が好きで、彼は美男子というのではなく顔が不釣り合いに大きすぎる感じで、その点からは落第だったが、かけている太い枠のメガネと、いつでも額に落ちかかってくる長い髪の毛がよく、それがすべてを救っていた。姉の恵子も聖子ほどではないが遠山定のファンで、「あの髪はわざと落ちるようにしてはるのところがうやろか」と二人でテレビを見ながらよくそんなへらへらず口を叩き合っていた。

聖子は彼の小説は芥川賞受賞作の『寂しさのほとり』しか読んでことがなかったが、さすがに週刊誌の愛読者だけあって、たとえば、いま彼は書き下ろし長篇小説の執筆のために

東京都内のホテルに「カンヅメ」になっているのだが、それが愛妻家の彼にとってどんなにたいへんなことか、三日に一度は家でさびしく待つ夫人のために花束をとどけさせている。さすがに『寂しさのほとり』の著者だけある」とその情報をのせたゴシップ欄に書いてあった」というようなことを知っていた。芥川賞をもらったのが今から数年前、まだ大学の学生だったときで、生まれは東京、夫人は高名な医者の令嬢で、今年四歳になるかわいいう女の子が二人のあいだにいる。テレビには比較的良好に出て来て、「戦後民主主義の問題点」とか「八月十五日特集」とかそういった番組で、ややかんたかい声で早口でしゃべった。大学は東大。専攻は仏文。卒業論文はアルベール・カミュ。

聖子に頼子の事故死を電話で知らせたのは、潮田さつきだった。さつきは元来は恵子の同級生で友人だったのだが、彼女もまた「A・F・S」の留学生で、聖子より数年前に一年間アメリカに留学したことがある上に、家がすぐ近所で、堺の上野芝から大阪を通って六甲山のふもと六甲学院まで通う仲間のひとりだったから（頼子も六甲学院に在学していたときは上野芝にいて、卒業後、大阪市内の帝塚山へ移った）、聖子とも親しくしていた。ピアノがうまくて、学園祭ともなれば学内の演奏会に必ず顔を出す「レギュラー」（と聖子たちは呼んでいた）の一人で、高校部を出るとそのまま大学の音楽部へ進学するのかと思ったら、家の反対を押しきって東京へ出て早稲田の仏文へ行った。家とは絶縁状態のよう

になっていて、内々は母親が少し仕送りしていたらしいが、どこかのキャパレエでピアノを叩いていた彼女を見かけた人があるというくらいいろいろなアルバイトをしてほとんど自活していた。早稲田を出るとすぐNHKの音楽部に入り、入ったかと思うと同じ部の人と恋愛して結婚、結婚したと思っただけで、今年三つになる洋ちゃんが生まれたのは離婚してから半年もあとのことだった。どうして別れたのか、さつきは口をとざして語らないが、恵子がさつきの親類筋にあたる人からそれとなく聞き出してきた情報によると、彼女が妊娠したとき、夫がさつきのおなかの子を自分の子でないかのように疑ったからだという、およそ聖子などには想像もつかない話であった。別れるとすぐ上司に頼んで大阪のNHKに転勤させてもらい、東京から上野芝の自宅へ帰って来て洋を生むとすぐ、NHKをやめて大阪の民間テレビに入った。同じように音楽部の仕事だが、機構が小さいだけに、さつきはあまり仕事の話をしないたちなのでくわしいことは判らないが、いろんな番組を手伝っているらしかった。

頼子をさつきに紹介したのは聖子だった。頼子——貴島頼子は聖子の六甲学院中学部時代からの同級生で、高校部、大学部英文科とずっといっしょだったし、しょっちゅうおたがいの家に往き来しあって、そのうちおたがいの弟（頼子の弟の貴島誠のほう）が和人より三歳年長だった）までが仲よくするようになってきて、恵子が「あんたたち、エスやねえ」とからかうほどの仲だった。それが大学を出て聖子が「とにかくあと二年だけ」と母にせがんで父には事後承諾のかたちで

大阪の国立大学の大学院に入り、頼子が大学院へもお勤めにも行かないでそのまま花嫁修業に入り、それとともに彼女の一家が急に帝塚山へ転居したこともあって、いつのまにか往き来が絶えてしまつて、それでもう半年が経つ。弟の和人のほうは、頼子の弟の誠が防衛大学校に入つて小原台へ移つてからも、かなり親しいつきあひをつづけているらしいのに、かんじんの姉たちのほうは、たしかに昔ほどのつきあひではもうなくなつていた。しかし、べつに二人ともおたがいが厭になつたというのでもなく、ときどき思い出したように電話がかかつてくる。かかつてくると母を呆れさせるぐらい長話をして、最後には「今度はぜひ会いましょう」で終り、そのときにはほんとうにその氣になつて言うのだが、約束の日になると、聖子の母の体具合が急にわるくなつたり、頼子にのつびきならぬ急用がでたりする。そんなことが数度あつて、そのうちそうした長電話もなくなり、聖子が彼女に最後に会つたのは、二月ほどまえに神戸のオリエンタル・ホテルで開かれた同窓会のお茶の会の席だつた。それもほんの短かい時間で、頼子は一時間もおくれて来て、会がすんだあとで「どつかで軽いお食事して行かへん」と聖子が誘つたのをふりきつて帰つて行つてしまつた。それでもお茶の会のあいだは聖子のそばに、つきっきりのようにして坐つて、つい半年か一年前のことを遠い昔の出来事のようになつかしげに話していた。それはほんとうに楽しいひとときで、学院時代に返つたような氣が聖子にはしたのだが、頼子はどうだったのだろうか。会がすんで聖子が食事に誘つたとき、「そうやなア」

と考え込むようにして言い、それからハンドバッグにつけたアクセサリ兼用の小さな金時計を見て、「もうおそいよつて今度にするわ。これから約束があつて行かんらんね」と、ほんとうに残念そうな声を出したのを見ると、やはり同じ思いだつたのではないか。「それじゃあ、また今度ね」二人は同じことばを同じ瞬間に言つて、ホテルのまえで学院時代のようになげさに手をふつて別れた。聖子はそのあとホテルに残り、頼子はそのままタクシーに乗つてどこかへ行つてしまつたのだが、学院時代のように「どこに行きはるねん。さては秘密のデイトやな」と気軽に訊ねられなかつたのは、やはり、聖子がすでに見えない壁のようなものを二人のあいだに感じていたということかも知れない。頼子はその日大きなリボンのついた赤いパンプスをはいていて、それはかなり派手な靴だから目立つた。また、彼女のすんなりした形のよい脚によく似合つていて、その靴のことはそのあとずっと聖子の記憶に残つていた。白状してしまえば、一週間ほど経つたある日、聖子は彼女がその靴を手に入れたという心斎橋の裏通りの靴屋にまで出かけてみたのだが、もうその靴はなかった。いや、その小さな靴屋は「うちはそんな靴おいたことおまへん」とふしぎそうに言い、聖子は狐につままれたような氣持で家に歸つたのだが、あれは靴屋か頼子のどちらかの思いちがいののか、それとも、ひよつとすると頼子が聖子に同じ靴をはかれるのを防ぐためにそんな出まかせを言つたのではないかと、聖子はそのあとしばらく思いまどつた。二人が大学部を出て六甲学院を離れてからは、梅田のさつ

きの会社の近くに頼子のお花の先生が住んでいたこともあって、さつきのほうが頼子によく会っているらしかった。聖子はさつきともしょっちゅう会っていたわけではないが、日曜の夕方など、ルーシーを連れての散歩のおり彼女の家のまえを通りかかると、子供好きの聖子はいつもふいに洋ちゃんに会いたくなって、蕨かずらのからみついたさつきの家の門柱の呼鈴を押した。三度に一度は、会うたびに「忙しい、忙しい、日曜もへったくれもあらへんわ」と口癖のように言うさつきも在宅していて、庭の芝生に洋ちゃんをなかにはさんで坐って世間話をしながら小一時間をすごす。頼子のことが話題に出るのもそういったなんでもない世間話のなかで、それも、このあいだ社の近くの喫茶店でお茶を飲んだというたぐいの話で、耳新しいことは何一つなかった。いったいにさつきは友人のゴシップについては口数のすくない女で、聖子のほうもそれを知っているものだから、たとえば、頼ちゃんにいま縁談がもち上っているかどうかというような聖子がいちばん聞きたいことはもち出せないのだった。そのためだろう、そうした世間話の小一時間のあと、聖子はいつも軽い苛らだちをおぼえながらさつきと別れた。

さつきの電話があつて、そのときちょうど電話のそばにいたらしい和人が大声をあげて階下から聖子の名を呼び、聖子があわてて立ち上ってテレビを消した瞬間、彼女の眼に斬り込むようにしてあざやかに入ってきたのは、それまで見ていた推理劇の一場面ではなくて自動車のコマーシャルだった。新しい型の小型車が突然画面に出てきて、それがたぶん名神

高速道路らしいハイウェイをまるで画面を突き切るようにして走った。聖子はほんやりと、ベレットよりこちらのほうがいいかなと思ひ、そのときもちろんコマーシャルが車の性能を告げ、音楽も鳴っていたのにちがいないのだが、それはまるつきり記憶していない。よくおぼえているのは、テレビを消して車の姿が消えたときのその消え方だった。あまりにも突然で、ハイウェイからどこか谷間へ転落したものとしか見えな。聖子は思わずギクリとしてそのまま下へ降りて行き、玄関わきの電話の受話器を手にとると、受話器の底から遠くひびくようにして聞えて来たのは、頼子の事故死を告げるさつきの低い声だった。

もともと、さつきの声は低くて、昔はよく宝塚少女歌劇の男役の真似をして聖子たちを笑わせたものだが、ふだんより一層低く、押し殺した声でさつきは話した。

「セーちゃん、びっくりしたらあかへんよ。……頼ちゃんがなあ、あんなあ、死にはってん。……自動車で衝突しはって……」

潮田さつきのことを聞いたとき、聖子の心に浮かんでは頼子の顔ではなかった。先刻のテレビの画面に突然躍り出るようにして現われ、一直線にハイウェイを突き切ったかと思うと、また忽然と消えた小型自動車の姿が、聖子の心の画面に同じような現われ方をして、また消えた。そういうのを虫の知らせというのだろうか、聖子はさつきのことばのなかばで廊下の板の間にそのまましゃがみ込んでしまっていた。

事故は三時間まえに第二阪神国道で起こったのだという。